

木々高太郎
全集

3

簡 吹
鼓

木々高太郎全集

3

笛 吹 ほか

朝日新聞社

木々高太郎全集

3



笛吹 ほか

定価 980 円

昭和 45 年 12 月 25 日 第 1 刷発行

著 者 木々高太郎

著作権者 林 峻一郎

装幀者 原 弘 (NDC)

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 図書印刷株式会社

発行者 朝 日 新 聞 社

© Shunichiro Hayashi 1970

東京 大阪 北九州 名古屋

0393—240083—0042

木々高太郎全集 3

目次

風水渙……………7

死人に口あり……………25

秋夜鬼……………38

柊雨堂雨話……………43

永遠の女囚……………69

＊長篇小説

笛吹——或るアナキストの死……………89

宝曆陪審……………291

婚礼通夜 301

ベートーヴェン 第十交響曲 320

ストリンドベルヒとの別離 333

東方光 354

葡萄 374

作品解説 中島河太郎 389

木々高太郎全集 3

笛
吹
ほか

風ふう
水すい
渙かん

1

十一月の終りか、或いはもう十二月に入っていたかも知れない。

夜になると、急に寒くなって来る。小僧は町の人家と人家との間の、風のよけられる、そしてなるべく父親の店を出しているところに近い、うす暗い場所に、しゃがんだり、よりかかったりしているのだが、父親が太極道人と抜いてある提灯ちとうの上に手をかざして温まっているところを見ると、羨ましくて仕方がないのであった。

太極道人というのは父親のことなのか、或いは父親の先生のことなのか、或いは時とすると、父親のやっている占いの神様なのか、父親の言うことを、傍で聞いていると判らなくなるが、とにかく、何事も太極道人にはわかるとい

うのである。

「商売の邪魔になるから、遠くへのいておれ、小僧」
太極道人は、こう言った。

だから、およそ誰でも、小僧としか言ってくれないのである。太極道人は、もうよほど前に、妻に逃げられたので、今は独身である。さすがに何でも判ると称する太極道人にも、自分の妻が自分を捨て去るかどうかは、判らなかったに違いない。

「今に、帰って来る、もうすぐ帰ると、易に出ている」

とは言うものの、妻はいっこうに太極道人のところへ帰っては来ない。

それだから、小僧は太極道人が店を出すために家を出て行ってしまうと、一人で留守番をしなくてはならぬ。およそ小僧にとって、この世の中で何が一番厭かというところ

の独りの留守番であった。

だから小僧は、睡くなるまで、父親と一緒に外に出るのであったが、それも、大道易断所の近くにいることは許されなかったのである。

「易を見に来るお人は、いろいろ秘密の話を持っている。

子供といえども同座は相ならんのじゃ」

理由は、これであった。

だから小僧は、客に見えないように、家並みの軒のすき間にかくれているのであるが、よほど遠くからでも、耳をすましているから、父親と客との会話は、おおよそ聞いてしまうのである。

当時、父親を悩ましたのは「今度の戦争は勝つか負けるか」という質問なのであった。いや、勝つか負けるかではない。今まで日本は勝つてばかり来たのだから、負ける氣遣いは一つもありはせんのだが、明日、何か勝報が入るか、入るとすれば、どのくらいの勝報であるか、という問題なのであった。

小僧には、なぜそんなことをお客が求めるのであるかは少しも判らないのであるが、子供心にも、この問題は一番興味ある問題であったから、父親の言い出す答えを覚えていて、明日の戦報の来るのを待つのである。

父親は、この質問が出ると、必ずわざわざ卦を立ててみ、答える。だから、つづけて二度、この同じ質問者が来ると、卦は同じに出る筈なのだが、実際はつい十分間の違いでも卦は同じに出ないと見えて、はなはだ苦心の態なのであった。

その夜の客は、一風変わったことを占って貰いにやって来た。

いや、問題が一風変っていたばかりではない。占って貰う貰い方もまた一風変っていた。多くの客が初めは何も言わず、ごく抽象的に、思わせぶって問題を提出するにもかかわらず、このお客は、ざっくりばらんに世間話のように問題を提出して行った。

それは、聞いていると、銀座の天賞堂という有名な、時計並びに貴金属商のところに通っている、貴金属工なのであった。

「おい、おやじさん、話は少し長いぜ。それから、これは易でわかることかどうか知らねえんだが、ほかに相談する人もねえので、おやじさんに相談しようてわけだ」

「なるほど、さてはお前さんは、この太極道人の易占を前から知っていないすったのかね」

「うんにゃ、知らねえ、しかし、この話のそもそものが、知

らねえ大道店で起ったことだ。話が初めから知らねえことから起って、ずっと知らねえづくめで今まで来ているのだ。これはいっそ、知らねえづくめでゆく方が判りがいいのじゃあないかと思つて、それでおやじさんのところに来たのだから、何も考えずに来たら、眼の前におやじさんがいたというわけさ」

客は、そう言つて、次のような話をしたのである。

何しろ、この日露戦争のために、あらゆる物価があがつて来たが、なかなか自分らの取り扱つてゐる、貴金屬、宝石、精密機械の値の上つたのには驚くほどである。それで、仲間の職工なども、誰でもやつてゐることだが、夜店をのぞいて、何か掘り出しものはないかと、食後二時間も三時間も廻り歩く。自分ももうひと月も前から、毎日天気でさえあれば、いろいろの方面に、夜店を探しては、ゆつくり見歩いた。

ところが、或るところで、奇妙なことがあつた。

戸板の上に赤毛布を敷いて、指輪だの、時計だの、まあ、いろいろのものを並べてある。二、三人の人が見ていたから、自分も黙つていちいち値段と、実物との鑑識してみたところが、いやどうして、値段のつけ方は、インチキだ。或る物は四、五倍の儲けが取つてあるし、或る物は、ほと

んどあれでは、今日の相場では儲かるまいというような値段がついてゐた。

そこで、自分が興味を持つて、眺めてみると、そこへ一人の若い女がやつて来て、自分にすり寄りながら、これもややしばらく、非常に熱心に見ているのだ。

妙な姐おねさんがあるものだと思つて、ちよつとふり向いてみると、いやはや、実に別嬪べっぴんさんであつた。

年齢は十八、九か、水だか油だか滴ししたるような島田を結つて、服装はたいしたことはないが、商売柄ふと見ると、左手の薬指には、素晴らしいダイヤ入りの指輪をはめてゐるのだ。あれが本もののダイヤであれば、あの指輪は時価七、八百円から千円に近い代物である。どうも本物らしい。自分なら手を取つてひと眼みれば判るのだが、手にとつてみたいものだ、と考へてゐると、驚いたことには、その娘さんが、前に並んでゐる、ルビー入りの金指輪に眼をつけて、急にかがんでそれを手に取つた。

「あの、この指輪は、おいくら？」

「へえ、それは八円七十銭です」

娘さんは、すこぶるもじもじして、いかにもこの指輪が欲しそうであつた。自分はこれを見て、心の中では、あんないダイヤの指輪をもつてゐるのに、ルビーの八円ばっ

ちの指輪を欲しがる気がしれないと思った。

女というものは、指輪に対しては眼がないのだろうか。

欲深なものだ。——いや、ダイヤの指輪でこそ姐さんの美しい手に似合うのだが、ルビーの指輪では、それを汚すものだ——。

ところが、このときオヤと思うことが起きてしまった。

娘さんは、いきなり、自分のダイヤの指輪を抜いて、屋台店の主人に見せた。そして、「あのこの指輪、そんなに悪い指輪ではないと思うんですが、取り換えできないでしようか」と言ったのだ。

自分は、自分の耳を疑った。

これは、ものの値段がわかる、自分のような職人にとっては、天地のひっくりかえったのに等しい出来事といつていいのだ。

屋台店の主人は、はたしてそうであった。いかにも気がないといったように、それでも、いったんその指輪を、カーバイトの光にかざしてみても「さあ」と言った。

「この指輪も、だいたい同じようなもんですな。金は、この方がいいが、石がルビーではないのでね——しいてお取りかえがしたければ、ようがす、一円打ってくんないせ。ほかじゃあ二円というところだが、今夜は寒いので、早仕

舞にしたいところですからね」

なるほど、気のなさそうに、相手の指輪に値段をつけたところはうまいものだ。そう来なくっちゃあならない、とは思っているものの、これを見ている自分は、たいそう妙な感じに襲われていた。

さて、どんな感じと言ったらいだろう。まるで、美しい、無知な処女が、甘言で貞操を奪われるところを見ているといった感じと言え、そのときの自分の感じを一番よくあらわすことが出来るであらうか。

娘さんは、一円と聞いて、すぐ^{がまぐち}裏口を出した。そして、一円紙幣を出して、それではこれで貰ってゆきます、と言って、ダイヤの指輪を置いて、ルビーの指輪をはめて、いそいそと行ってしまった。

自分は、その後姿を見ることも出来ないくらいに、自分の眼が、その娘さんの置いて行つたダイヤの指輪に釘づけにされてしまったのを感じた。後の方で、その娘さんの足音が遠ざかってゆくのを聞いていると、じりじりして来て、やがてクワッとなってしまった。

「やい。その指輪を出せ、暴利にも程があるじゃねえか。職人を前に置いて」

と、いきなり出て来そうで、それを抑^{おさ}えるのに、実に苦

心をした。

「待て待て、これは一番、見ていたのだから、俺が買い取ってみよう」と思い直して、自分は猶予なく屋台店の主人に声をかけた。

「阿兄さん。今、娘さんと取引をすなすった指輪を見せてくれねえか。——もしよければ、譲ってくれるといいんだが——」

その男は、「へい」と言つて、指輪を自分に渡してくれ

た。自分の心のうちには、このときいろいろの疑いが起きて来た。この男は、この指輪の鑑識が出来ないのだろうか。そうでなければ、自分が、見違えているのだろうか。手に取つて、自分もカーバイト燈にかざしてみた。

まがう方なきダイヤなのだ。今、貴金属の物価の上つている最中に、このダイヤ一つで千円がものは確かであるのにらんだので、自分はわざと、指輪を取り移しながら、「どうだい、君が八円の台に受け取ったんだから、八円に買おうじゃねえか」と言つてみた。

その男の顔には、一瞬間するそうな影がさした。さては、何か来るな、と思つていたのに、案外な答であつた。

「へえ、ようがす。今旦那も取引のいぢぶしじゅうをこら

んになつていたんですから、嘘もかくしもありやあしねえので、どうです、その上に一円ぶつてくんない。九円ということに、——」

自分は、あわてて懷中を探つて、十円紙幣を一枚出した。危く十円なにかししか持つていなかったのだが、それを出して、一円の釣銭と、そのダイヤの指輪を持ち帰つたのだ。

2

小僧は聞き耳を立てている。子供ながら、この奇妙な話を、ほとんどことごとく理解した。理解したのみではなく、聞きながら、いろいろの疑問を起した。

客の話は、まだこれでおしまいではなかった。さらにそのつづきがあつて、そして初めて占つて貰いたいという核心の問題に触れてくるのである。

——さて、自分は指輪を持ち帰つて、翌日、お店（天賞堂）へ出て、番頭さんに見せた。見せるときに、実はこれは、或る人から貸金の質に取つたのだが、貸した金を返してくれぬから、自分のものになしようと考へている、と嘘を言つた。

「こりや立派なものだな、いったい、いくら貸したのだ」

「だんだんに貸して、五十兩に近いのですがね」

「ほう。それで、これを手に入れてよけりゃあ、俺が買つてやろうか」

「ええ、向うでも、仕方がないから、この質は流してもいいとは言ってるんですがね」

「お前じゃあ、仲間売りをするにも、疑われるぜ。第一が盗んだ品じゃあないか、とすぐ思うぜ」

「ええ、それは考えています」

「俺に売らないか、二百五十兩でも、三百兩でもいいや、俺ならこなしでみるから。その上、儲けが多けりゃあ、あともっとやってもいいね」

はたして、番頭さんも、この道の専門だけあって、その指輪の真価をただちに見抜いていたのだ。それで考えたあげく、三百円で番頭さんに売ったのだ。

そこで問題が、今度は自分の心の内で起きた。

何しろ、自分は、屋台店から買うときも、その指輪の真価を知っていたのだ。九円のもの三百円になるということも、古物商の鑑札を持っている自分には、大して暴利だとは思わない。また、戦時に布レかれてゐる、暴利取締令にも触れるとは思わない。けれども、仲間内の仁義というものがあつた。屋台の主人が、その指輪の価値を見分ける眼が

なかつたにしても、みすみす、こんなにぼろい儲けを自分だけ得るのは、同業としてはなはだ忸怩じくじである。そこで、五十円だけ包んで、一昨夜、再び屋台店を訪れた。

行ってみると、同じところになるほど屋台店はあつた。しかも、その屋台には、同じものがのつてゐるのだ。ところが、人間が變つてゐる。そこでしばらく躊躇ちゅうちよしていたが、思い切って尋ねてみた。

「へえ、兄弟分じゃありますよ。ところが奴は、豚箱へ昨夜行つたんでさあ」

「警察へ引かれたのだね。何の罪で？」

「さあ、よくわからないのですが、いづれ贓品けいず買いでしょう。あいつ、知らぬことに手を出す癖があるもんだから、贓品と知らないでやつたんでしょうが、ちょうど引つかつたのです」

自分は考えた。

これは、うっかり変な真似をして、自分もかわり合いが出来ては困る。自分のみならず、番頭さんや引いては天賞堂のお店にかかわつてはならぬ。——では、この包み金の五十円は、知らないで指輪を手放した、あの娘さんに渡すべきものであるか。

いや、そういう筋合いはない。

そこで、ともかくも、太極道人に卦を立てて貰いたいのだ。

この指輪が本来贓品であるとしたら、あの娘も一筋縄ではないに違いない。贓品でなければ、密輸入か、それにしても、ただ者ではあるまい。とにかく、正当な品か、正当でない品か、太極道人に卦を立てて貰って、安心をしたい。そして、もし易から、これはこうすべきであるというようなことが判るならば、そうしたい——と言うのである。

「ほほう、なかなか奇特なお志じゃ。易は聖賢の道と称しましてな、一種の処世の指南をするものじゃ。いわば、賢く世を渡る術と申すべきでござるから、あんたの志には必ず答がなくてはならぬと申すものじゃ——どれどれ」

太極道人は、仔細らしく卦を立てた。

そして、單柝たんたつの組合せを見つめながら、ふうんと長太息をした。

「なるほど、これはむずかしい卦じゃ。卦では、風水漢ふうすいなんと言う。これは、贓品でも、密輸入でもない。その娘さんの心境たるや公明正大じゃね。何も、わしはその娘さんを見たわけではないから、惚れとるので言うのじゃないが、しかし、これは進んで吉じゃ。この問題についてはすこぶる

發展性がある。あんたはその娘さんにモーションをかけるもいい。進んでなお、その財物をめざしてはいってゆくもいい。これはこのままで終らぬ事件であるが、あんたに罪はからぬから、安心をなさい。——この卦では見料もやはり發展性がある。五十銭以上おぼしめしでよろしいということになる」

天賞堂の職人であると言った若者は、これを聞いて安心したと見えて、金一円を置いて去った。

小僧は、この話を暗い蔭で聞いていて、心の底から好奇の心が溢れて来るのを感じた。

客の話では、屋台店の出ているのは、この近所である。その屋台店には、その若者の経験したような、思わぬ幸福が転がっているのではないか。——それが小僧の胸のうちに起きた第一の考えであった。

その姐さんは、どうしてそんな高価な指輪を惜しげもなく捨てたのであろう。その姐さんは、もっと同じような高価なものを持っていて、それを惜しげもなく捨てるのではないであらうか。そうであるとすればそれは何のためであるう。

これが小僧のうちに湧き起った、第二の考えであった。見ると、太極道人は、しきりに店を片づけているのだ。

小僧は、これは変だなと思った。今夜は、先刻の若者がくれた一円のほかに、老婆が一度身の上判断をして貰って二十銭の見料を払っただけであるのに、早仕舞をするのはおかしい。

太極道人は、どんどん片づけて、さっさと帰り出した。

小僧は仕方なくあとについて、とぼとぼと歩んでいたが、その間中、先刻の不思議な物語に心を奪われていた。

「おい、小僧。これをやるから、焼芋でも買って来て、食べて寝てしまえ」

父親は五錢玉を小僧の手に握らせた。

「やきいものあったかいのでも買って、寝てしまいな」

小僧は、黙って五錢玉を受け取った。

返事をしないから、何を小僧が考えているのか父親には判りかねたが、小僧はなんとなく満足してはいないらしいことは見て取れた。出て歩かれてはうるさい。昼でも、夜でも、そっと父親のあとをつけ歩くに妙を得ていることは、父親もよく知っていたのだ。小僧に知られたくないようなところへ行くときは、よほど要領ようりやうをして行くのである。今日は大丈夫だと思って、ひよっと見ると、はるか町はずれのところに、父親に気づかれないようにあとをつけて来る小僧の姿を見て、がっかりすることもあった。

「どうも、これは何か特別の才能だな。他人を必ず執念深く尾行する。恐らく、少しも小僧に知られていないと安心していることが、或いは全部小僧には知られているのかも知れない。わが子ながら気味の悪い才能だな」

父親は胸のうちに自問自答しながら、今夜はどうしても小僧をうちに寝かせてしまいたいと考えた。

そして、懷をさぐって、さらに二十銭をちゃらりと出した。

「それからな。ちゃんちと出かけてくる。あまりおそくならんうちに帰ってくる。坊主は、やきいもの買いに行くついでに、酒を買って来て置いて貰いたいのだ。いつものとおり、二合な。お釣はなくなすのじゃないぞ。それから、徳利は、よく洗って貰うんだぞ」

父親は、そう言って、部屋の隅の、見通しになっている台所を指さした。

そこには、近江屋と筆太に書いた、厚い一升徳利があった。

用事さえ言いつけて置けばいい。すると、自分の帰るまでに、用事はたして置かないと、ひどく叱られることだけは知っているから、まずあとをつけて来ることは出来ない、というのが太極道人の腹であった。